

城郭を遙く見下しいで試んとも、探馬又正鞍番馬三疋を添へ
又鞍番たる馬の傍に立たる馬の先とあり受けて中より制して略
紀する又鞍番馬へ是は「城中」茶司が座敷の着れりふらひしてそを
立ちうくるをみて義経諸お示して曰抄の傍なる探馬ばかりの
おに勅あるものと知る。用心せんかく申し心得給ひさるやと
下知とあつても母う三十騎斗を念ふおれ居されたる二丁たり
汎と落して扱てこれ一役臺の下へ平なる石ありますりや最
佳推りさなりて苦びたり翼うてはへう小通入なれども思ふど
とい直ま下り直ま初も改るもけりぞればあきまそていまるる候よ夫
昭と思ひ定めける。評曰 徳谷のふりのハ大兩無流を理きて凡そ十多智であは
一の勢のあらうゆとりはあり。あつてもけりある人。今こそたまにわづかの「殿臺」
の新場ありそれより下へ肩腰をきかぬとし。戦ちうかんたのみ身はしたと人後を知らず
人馬さうとも後と人さすうはし。物うきさすうきさすうの數は九三三同左右のもろとなり
一踏み居るといふさう人さすありね。素内者むつとさうなるぞ。

安徳天皇行宮跡

宿老より粗鏡夷除乃地なりと云々

安德天宮行宮古跡

官家より租税免除の地ありとぞ

三谷の上より、峯より、溪より、とせよ。吉ね二千本、身より、不毛の地
 たり。これ、三谷の跡、堀や、安徳帝の宮と、移す。方其に、向ふより

悟とと思とひ定とめたる

評目

渡谷^{ワタニ}の^ハ大^オ雨^{アメ}は^ハ深^{フカ}い^ハ川^{カハ}に^ハ流^ナれ^ハて^ハ石^{イシ}を^ハ十^{ジュウ}年^{ネン}も^ハ流^ナれ^ハて^ハ石^{イシ}の^ハ割^ワれ^ハ合^アひ^ハる^ハもの^ハなり^ハ何^{ナニ}と^ハい^ハへ^ハば^ハ壺^ウを^ハ破^ヤる^ハは^ハ落^オち^ハて^ハ石^{イシ}の^ハ割^ワれ^ハ合^アひ^ハる^ハもの^ハなり^ハ

壁推ウさなりて苦ウい
うウ翼ウくウてはウふ通ウふウれウもウ己ウ金ウ

流と落して抄てゝいふ一役臺のどく平より石ありまより下を

下知と勘
くもどろ
三十騎斗
五念五想
以落され
方二丁を
う

勸あるものも恥ぢて心を得るはさうな

五々ろくろをんて義経諸公を示して目おのろけなき府匠にさく刀

紀方二葉西門漢書卷之五十五

[illegible]

馬の先より受けて中列にて立つ

爲^{なり}郭^{かく}を造^{つく}又^{また}見^みし^しへ^へで^で武^ぶ人^{にん}と^とく^く保^ほ馬^ば又^{また}足^{あし}鞍^{くら}を^を馬^{うま}三^{さん}疋^{ふた}と^と爲^{なり}し

二の谷

け谷長と三丁併換八町と九町谷により波お降すべ
 け十町余三の谷ふまゝの町三丁余をなぞさう

三の谷

け後長と二丁余撰九箇多き九百廿口
より枝折源と云す箇余をぐに丁余の箇よりあり

鍾伏山

神とてをうふ何す（一） 神（二）とてをうふ何す（三）
 一に極及論く將く神用と量む

撞懸松

一の首の
近奉吉松に拵て今に極徳寺の吉松の株と切て札板と除き若田氏の形揚

矢野峯

[illegible]

熊谷車

山二の敷 いふ 三の谷の やま
西より うしろ 然る平山 なるへらやま
掘り うり けのくが 然る なる
より先陣 よりせんじん とせん とせん
と 累々の かさね 如 ごと

子

古道を傳へて一の管絃折除ふ折出く西の本よりあつて一の管の先陣と名付のりたる

五

公よりたゞ二の^{やうな}めとまひたり

大五輪

石塔 俗に敦聖の石塔と云ふ三の谷の石塔遷りあり其ハ古ノ聖蹟ナリ

平家物語

崩主候又落^{おち}るやかくれど一^{いち}えに古^{ふる}よりよみず一^{いち}
あつり^{あつり}きより^{きより}きり^{きり}しむ^{しむ}て^てふかり^{ふかり}ら^らしめ^{しめ}ら^ら

五

其を氣配し、其の文相理整へ、其の堅きなり。石乃、唐漢の儀

口 丁

一丁強源の世に源氏一子あり能谷治

二

正統二年(一四三五年) 木下石上之勢と異なり、結て瀋江、海に窮地と云ふ

1

一、此乃

汝^う強^かく^も又^{また}抄^{しやう}ひ^ひく^く禁^く心^{しん}弱^{じやく}我^{われ}ま^まと日^に来^きち^ちる^る小^こ弥^やに^にと^と憐^{れん}
 一^{ひと}賜^{たま}け^け進^まる^るぞん^んは思^{おも}へ^へとも隨^{したが}ふ^ふぞん^んに^に御^ご善^{ぜん}提^{だい}と^とい
 美^み実^{じつ}強^かく^も訪^{ほう}ひ^ひや^や人^{ひと}の^の夢^むの^の落^おち^ちて^て御^ご免^{めん}せ^せと^と目^めと^と塞^{ふさ}ぎ^ぎ齒^はと^と喰^く合^あ
 ぞ^そと^と流^{なが}る^る御^ご首^{くび}と^と搔^か落^おち^ち平^{へい}家^けの^の人^{ひと}の^の討^うち^ちる^ると^とも^も情^{なさけ}と^とて^てに
 ぞ^そう^うの^のし^しき^き漢^{かん}竹^{ちく}の^の笛^{ふえ}と^と香^{かう}も^もわ^わに^にま^まじ^じき^き綿^{わた}の^の袋^{ふくろ}入^いる^る禮^{れい}乃^{のみ}
 引^ひ合^あせ^せと^とれ^れう^うり^りま^ます^す後^{のち}跡^{あと}歎^{かな}心^{しん}て^て蓮^{れん}生^{せい}坊^{ぼう}と^とは^はな^なる^る後^{のち}馬^{うま}
 禮^{れい}笛^{ふえ}と^とも^も又^{また}首^{くび}と^とな^なる^る又^{また}鐘^{かね}盛^{もり}一^{ひと}道^{みち}ら^られ^れる^る

界川

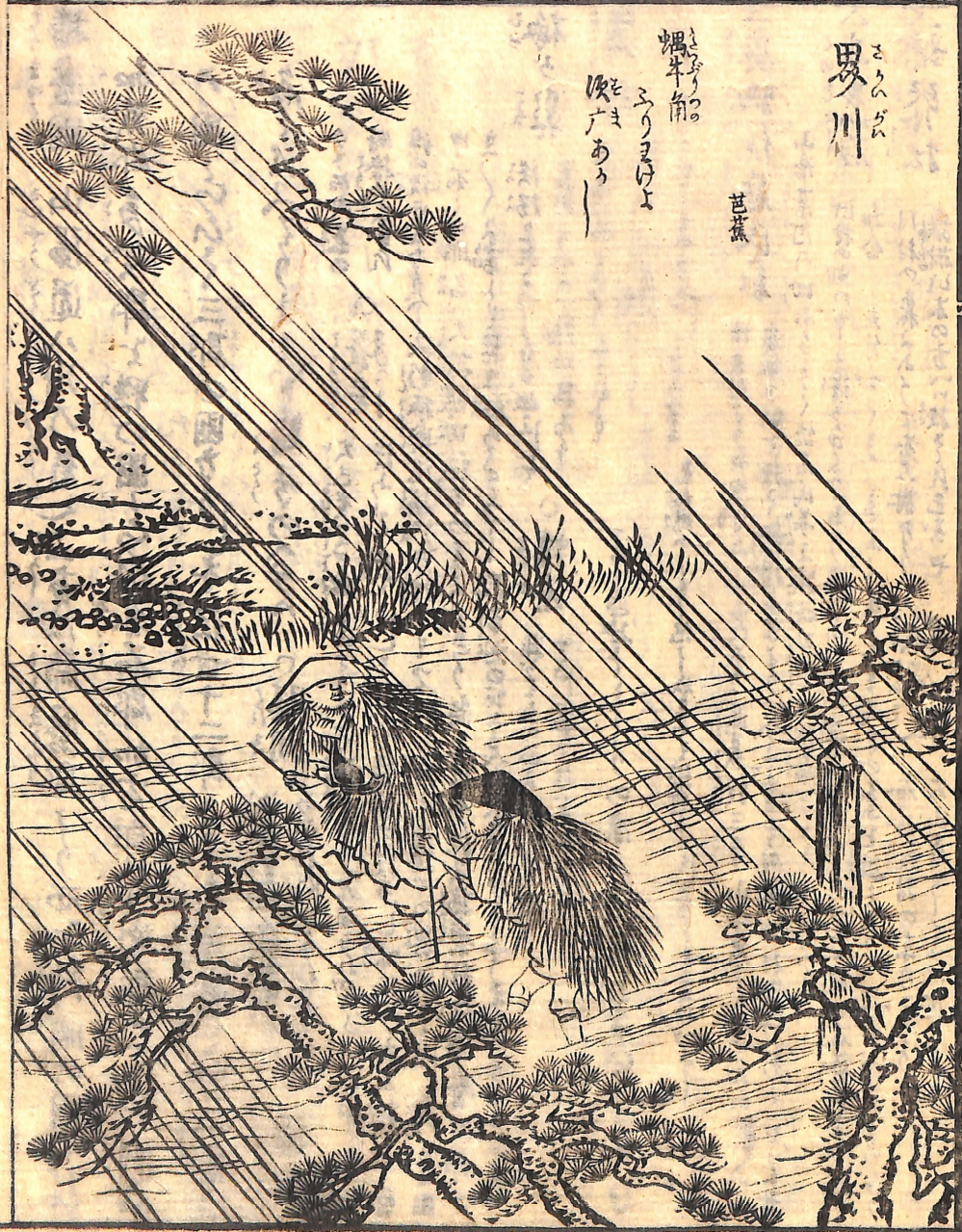
卷之三

界川

蝸牛角

ふりまけよ
次あり

芭蕉



播磨國ハ山陽道八州の着之上は飾磨郡より西と針間の國といひ

加茂郡多安郡と嵯の國といひ赤石郡加古郡印南郡といひ明石

の國といひ三郡の國かりしを後世十二郡より播磨とて一國の

名といふなりまゝの國号のなり。嵯間。赤石。赤石。赤石。

梅ヶ鼻。梅ヶ鼻。梅ヶ鼻。梅ヶ鼻。梅ヶ鼻。梅ヶ鼻。梅ヶ鼻。梅ヶ鼻。

奥畑佐藤氏。奥畑佐藤氏。奥畑佐藤氏。奥畑佐藤氏。奥畑佐藤氏。

本系石。本系石。本系石。本系石。本系石。本系石。本系石。本系石。

妹沢松。妹沢松。妹沢松。妹沢松。妹沢松。妹沢松。妹沢松。妹沢松。

大山寺。大山寺。大山寺。大山寺。大山寺。大山寺。大山寺。大山寺。

師如來。師如來。師如來。師如來。師如來。師如來。師如來。師如來。

惠和尙。惠和尙。惠和尙。惠和尙。惠和尙。惠和尙。惠和尙。惠和尙。

若集滅道。若集滅道。若集滅道。若集滅道。若集滅道。若集滅道。若集滅道。若集滅道。

力人重五。力人重五。力人重五。力人重五。力人重五。力人重五。力人重五。力人重五。

垂水。垂水。垂水。垂水。垂水。垂水。垂水。垂水。垂水。垂水。垂水。垂水。垂水。垂水。

垂水神社
日向明神

ま本 ちのり神
そののぼる人のみ

家ウーミ

ちのり

紫の玉垣

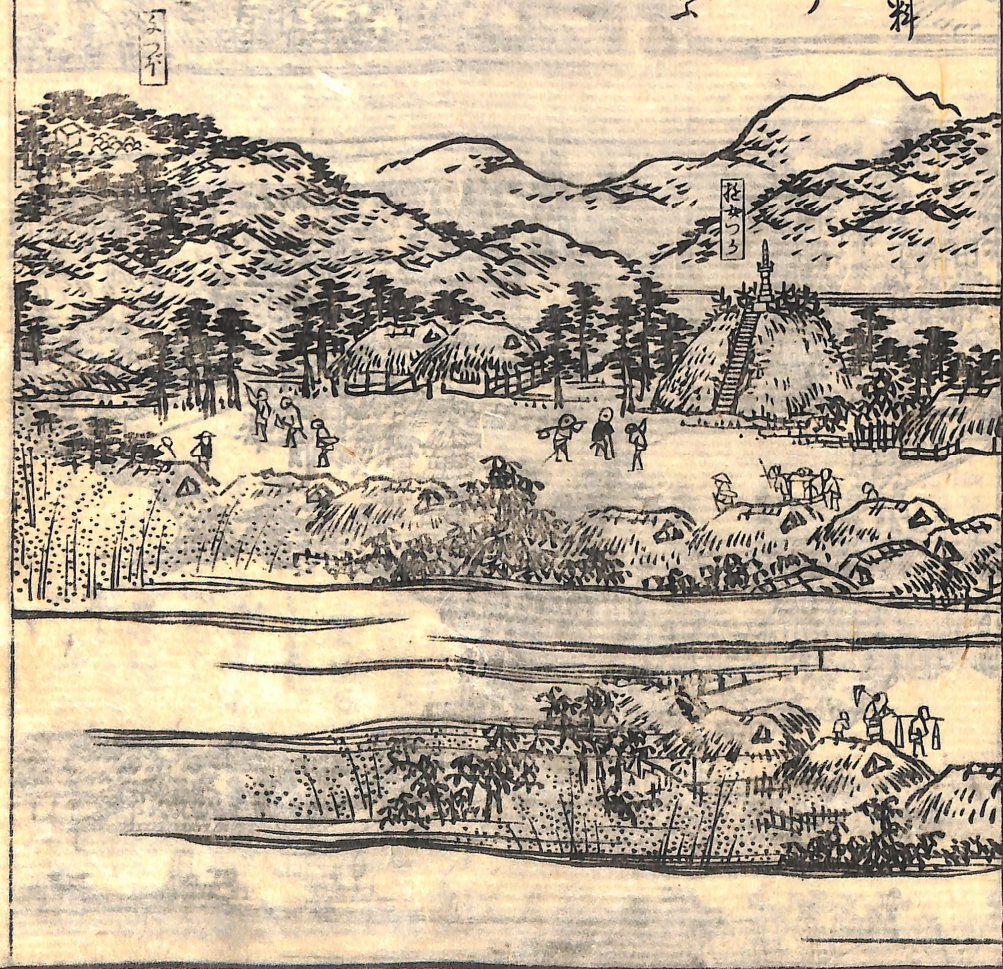
後れ

按るふ神名帳は海神
とある一は是ワタスニ
登一即候若くは表申
座の三座之日向明神と
あるをいふ小戸橋の
國名をいふ



源忠國より二石余の
糸料糸を新橋料
として御寄附の
其山横越

ちのり
ちのりて推着
後とわて橋



大々山

地皇三所指現

美神 新田 孫滝

大釋石

今其法に如ま

輪観るに安ん

良く出づる鬼門

法護の靈屋あり

三がいの山也

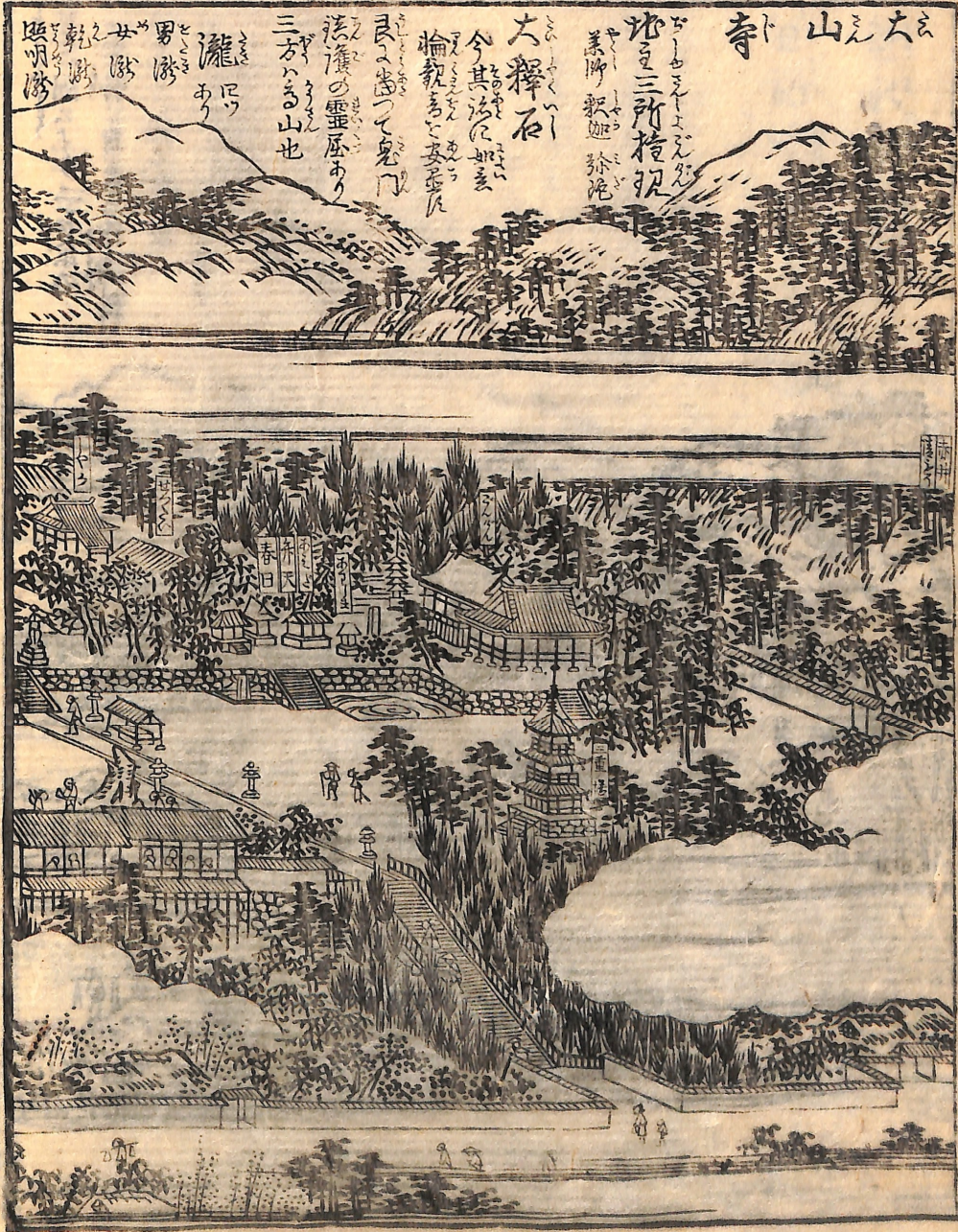
瀧

男

女

乾

照明



山上 奥虎 観音

白河法皇御幸

後宮の院外幸

大塔宮の塔

それハ所奇附の

佛像經典

潤度教

傳來

甘



摩耶谷

温泉

大観

所

所

所

所

所

所

所

所

所

所名

三社 例案八月十八日

東たるも器の上ありて大伽藍坊舎敷百ありしところを
とて今の所は郷の内三十余丁少く寺号を佛ね及なく

其廣地とみわたりとより
西たるミ御石人家の茶にあり
上より室等園院階の俗候より
連成の只此を惜まの商
人竹村より若江にの移りぬる連
一とぞ其実をあらけ

於女塚より一いつこい堆たいの丘かみよりて周圍しうばうを尺しやく寸すんの陶壺とう殺ころむむり

車輪のごく怪しき事をいふは乃荒陵を諸國にけり

多し既^{もと}より出^い國^{くわ}娘^{むすめ}踏^{ふみ}乃^{すなは}遠^{とほ}國^{くに}を寺^{てら}の東^{ひがし}に霞^{かすみ}の月^{つき}ふくむ園^{ゆゑ}圓^{まる}

壺ありて車輪の正し又は國加西郡玉璽と云ふ不_ふに_に城_{じやう}と云_{いふ}物_{もの}

又家良より西三十丁許又冰功皇后の陵ありと云捧宣と
 翁はなれなかり人無きて教て逝より此を昭二年をうり

馬立

○日本紀垂仁天皇三十二年殉死を據じて出

雲圃より土部百人と喚び墳をえて以て人馬及び種々の形を造る人
人は易て陵墓を拊多々後世の法を以て依てけ去物を号て墳輪と

[illegible]

又後々當米城下の部外より飛川等より入るは穀まき偶人との所に卽倒せあり
其より農人の多くして其挨拶農人のよしを外振出に穀物をもちあはし是日か紀
登に紀は御筆よりて類はあ添ふ帳よりしりし其例よりてされども今残るもの
石人石室のものなりと云へり又石の宝殿の案にも叙れ

○一説は山陰の久米仲哀帝の別腹忠徳王詐て造る重なる是

今日ハ紀神功皇后紀ヨリ三韓征伐の後太子と薨此處に薨終ハけり
 孝德天皇と害せんが為天子の陵と造ると偽つて播磨より出く山陵を

明石に造る糸船を編む明石の民より淡路の岸へ亘る其橋より石を

運ぶ其人のみより細辨と云らせく皇后の還ると待てり云

按さふけはよふの味なり一説はとて壺と号て三市選萃の府は彼壺とむと極て歡楽の
 城なりと云ふなりけり又仲夏節の盛と云ふは洛陽と京師を何州長也とあり
 る壺の西より魏子の陵の西までの名なり後唐年元二十八年卷五陰曆明石匠丁鳥磽之
 て磽が故と云て軍ありと云く雅烟磽しく磽あけなり云々

舞子濱

たるもの西より山田村との間

け地を越え多れい必名不とくふは眼と

されい名高きより天少に安へり毛正は砂色松の翠と物と異なり
流之砂の雪より白く教を提の松は高低ろく梢と等へてよくあそ
ば乾屈曲をのけり足不かりて糸のを強に深くして膝の毛の正に

岩家

事家の溪海より二三丁ゆのよりつき

同に二丁半源と二回余高と一丁

計とて大小折交り大石とて造る登根に二回余高とて大之門に一版紙
く入より毛皆つりへり墓とて埋きたる物雨露よりみれかく破じ
し乃也大たの人あなとて流し用中ぐり尻不くよけ敷ま

山田

希ふ大高谷の
より村あり

平家物語高倉上皇殿海津幸選御の元八月の月天晴

海より長閑へくは津不の御松とてにみ多うせて今之恥より皆漕出は雲
の波烟の浪とかけ凌ぎ流ひく其白の播磨園山田の浦よりそせ終へ

吉祥山多聞寺

彈石山田村より十余
丁ゆ山田村より

天石宗用基慈光寺所貞親多中又創也

本多思少門天

○尚寺及び近郡津赤印の伽藍地は主の正に鬼退とて

法ありつ月の比よりたまりしやあつて寺の百姓を級はあつて若敷十人
若敷十二月末より法進修あり其日言六丁附より一山の傍後堂より集し佛若
よ万燈とくけ法修成の中刻より入れ内陣より大小の左殿法修成と打ま十
日入り廿多きく男より十人より鬼退は出立具足を能り序修急は合せ

持成お合せと急修あり入れ内陣より入れの太鬼又人より入れおこれそ
りて小鬼より入れと御をありけ太鬼の面より三尺より入れ其古物之身
入て鬼退とて入れと入れの太鬼又人より入れおこれそ
追ひとて後非火并と打うて寺角と踊りやうは鬼物の群集あり

大花谷

これ明石の歌へ先より王より家修あり

○武云付右諸國より屯倉と

ついで朝廷乃正祝と花を倉より若け花の正に不れやうと

凡雅集

世の中さいかく修ありと修ありと

今ひふりかはらじの浦よりと晴中ぬ我母のいふ

旅まうとくはあとのまぬらん母のいふとれむまやふ

拾遺集

世の中さいかく修ありと修ありと

糸子濱
 武芸に流るる
 横より後山
 つき其同じ懸
 とまりり流るる
 の風ふるふ吹こ
 て本との宜とみ
 後のはれ置とみ
 にしほく甘き月
 の光と得くうの

源貞世道ゆき
 明石の浦に流るる
 の光と得くうの



うるうしう雪風まき
 せうせうと縁の松の

うるうしう
 うるうしう
 うるうしう
 うるうしう
 うるうしう



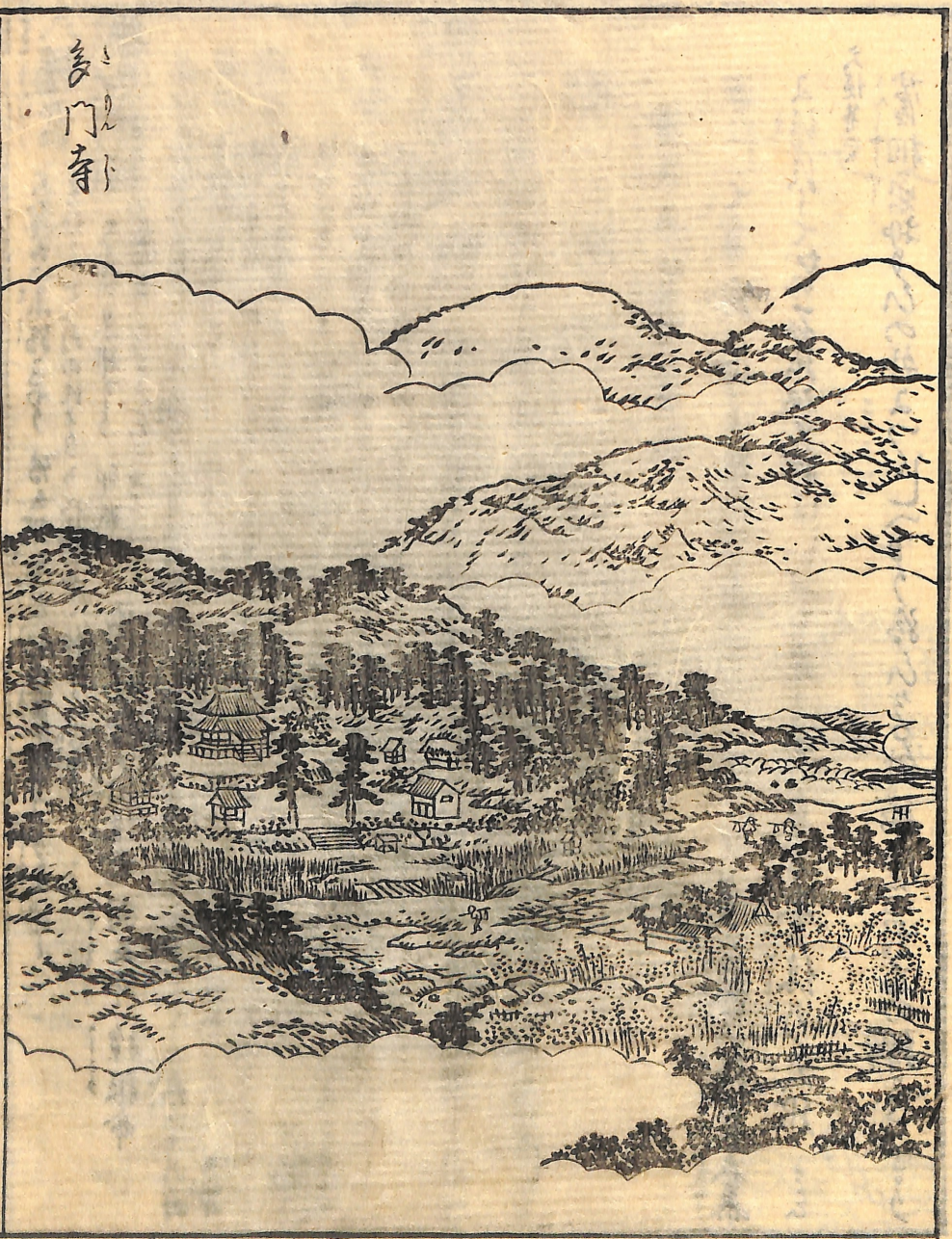


傳法輪寺



三ノ坪

多門寺



八幡宮

大森の末裔あり 俗に新智新の靈を祀り 弓矢津と
号けしとつものひより 八幡宮と称し 山崎あり

稲九津河

大森の系津あり 印級 系津三座大山祇命 面足命 惶根命
南初角三の字三座三座と曰し 系津三座大山祇命 面足命 惶根命

社記云人々三十日代撫天皇の所時修禊國祇智新南嶽人々小我人その時
中國の三魂明津といつて功ありしなり即三魂明津と云ふは創紀九月九日津
與一基系と津宮とをいふなり又年ありといつて押この面は向親をいふこと
類又大の字と云ふ系祖の望と流り系祖を祖と引矢と押牛とありと津與
依なり牛の口え又系祖の耐境あり 稲九とも稲妻とも又稲接とも云ふ系系津
或云稲九稲妻とも云ふ得なりしなり又稲集りやあり三津集の云ふ風云九人
往古祖祖祖とありしなりと云ふなり又大森の地名に合せ考ふなり

休天津河

西はる 延喜元年正月を宰權師に任ぜりて筑紫に遷せ

らる付後此地を歴終り付時長迎なりて其事と嘆く津其志と
感しと擣の傍の石に憩息せ詩を詠ふ

驛長無驚時雲改 一栄一落足春秋

既して宰府より移り明年二月廿八日宰府に薨じ驛長表
と終りていの石に臥て津と社と建り是と云ふなり休り天津と云

大森第二

菅相重母のの外より移り付橋麿の明石の驛と云ふなり



東邑私記云仁和元年
菅云藤原の任に極き
終り付明石の驛なり
樓壁と詩を詠ふ

離家に日自傷春
梅柳何因觸處新
為問去來行客報
謗州刺史本詩人

流ひろふひまやの長いしく押入るきと御流じて惜し路へるま

源氏派 廣く源氏明石へわたる人をもとむる人ありて
其名録の言まふ

ひまやの押さふ詩とくく人もみなるはして押さふなりぬく

らん押さふなりぬく 先は其言の押さふ詩の言なりと云ふなり
源氏集に云ふなり

忠度墓 大谷谷の西のれ場人丸の石標より
石碑大小二ツあり小碑花の標より

源忠國卿の和歌なり

今いふのりれはしは誠なる名のとけきとある名を推す

其言の遠縁と云ふは「流にねとく人なり」といふなり
大谷の源氏集に云ふなり

腕塚 忠度墓より三丁小流土町の北東あり
西馬川 忠度墓より人丸の人の
名あり細流なり

押入人麻呂社 忠度墓より三丁小流土町の北東あり
名あり細流なり

本隊長七寸妙り勅達の方月い洋なりは當社とく小後といえなり

明石の地盤なり附なり明今の地内は地なりなりて軍人丸塚の戦ひに

と記せり尚今地中にも小洞あり本朝文釋教先人麻呂の源と云ふなり

姓い押入名い人麻呂上右の秋人之持統文武の朝は仕へて新田高市の

王より遇れん秋道の聖神と崇めてかきく代々帝王の奉幣祭の

御制と揚つる享保年中二位の僧号なりは秋人の徳よりなりて外に

らに 人丸の地は事法に奉りて
名あり細流なり

士は是が記とるしむは記あり播磨國平菴瑞宣書して奥に記するの

名松平信之の士又十九人あり一人町人二人と記せり

○又そのの秋に古今集羈旅の郡よりく即人丸石見國へりるを

附るふけ浦より恥とせし附の言ふ是玄妙の境とく古人皆是と

秋英は家より家より社と建たり楓又け秋の意は解くなりなりなり

うとまきくはむのしきくしていふなりなりなり小流波の僧契仲餘

材抄は解く不其澄はしとく載者これに感に因てく其大略を

はのくとあうれ浦なりなりなりなりなりなりなりなりなりなり

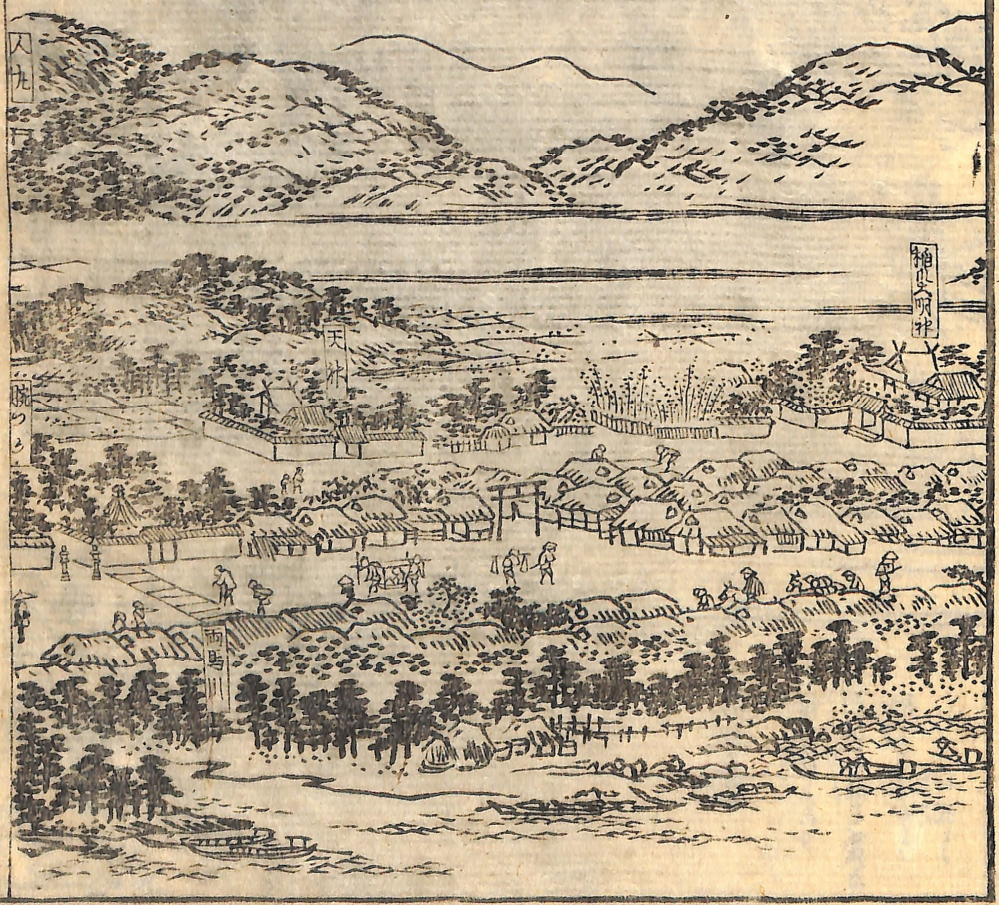
大倉谷

八幡宮
稻丸大明神
休天神
西馬川
腕塚



けはまたまの末綱とら
そのをイカナコとらひく
そくえの附の端と水と
かへて井湯と

池をあらうとる
そのまじりあけ
池
基奥
兵庫の都
カニス
これ





寛文年中松平日向守信之度碑と建らる其文ハ林道春これを撰書以其序甚長之なり 銘曰

柳本之種

和歌之家

千歳模範

六義英華

山川草木

雪月雲霞

託物而感

覃思無邪

言言之葉

字字之花

聯技以茂

鋪玉無瑕

敷島道通

詞源水縣

涌然而出

詰乎無涯

几鳴高岡

馬生渥餘

絶類而優

有誰而加

赤石浦曙

白霧舟遮

廟祠認跡

冠蓋成衙

石州高角山人麻呂の祠なり

碑文ハ大興源卿と撰に人丸幸と考ふるなり

又大和國漆

上郡治道森人丸の歌塚なり

碑文ハ佛國寺百拙和尚の撰に大和名不國寺とあり

享保八年人

丸一ふ年ふ出ふ吉田侍從兼虎房門佐兼雄朝臣奉幣使として正

位と贈らる宣命後記石州高角祠(傷る其時明石の祠より正一位

と準源氏へき勅命あり禁裏仙洞の西御所より石播兩社(法樂

の御制あり

月照寺

里謠曰當社明津の安養と傳ふ安養と傳ふるの靈應あり安養人なり

安阿弥の地同基に安養和尚あり

赤羽神社

人丸社のやふなり古伝赤羽ハ明珠の異稱之所祭恐ハ明王

赤羽村延喜式赤羽帳

方々

天日槍播磨國に泊る其播磨の物り中又羽左珠赤石珠

あり雲仁記より西國郡名より出るなり妙見社赤松寺

明石浦

郡中海邊

明石沼

海

明石海

明石灘

明石濱

明石通門

見ま

せば赤石の浦よりける火のかよそあなる跡なり

門部王

後

深あまねる煙よりまじりし秋の夜の月

中務

明石

海

明石海

明石灘

明石濱

明石通門

明石

明石

海

明石海

明石灘

明石濱

明石通門

明石

明石

海

明石海

明石灘

明石濱

明石通門

明石

明石

海

明石海

明石灘

明石濱

明石通門

明石

明石

海

明石海

明石灘

明石濱

明石通門

明石

明石

海

明石海

明石灘

明石濱

明石通門

明石

明石

海

明石海

明石灘

明石濱

明石通門

明石

明石

海

明石海

明石灘

明石濱

明石通門

明石

明石

海

明石海

明石灘

明石濱

明石通門

明石

明石

海

明石海

明石灘

明石濱

明石通門

明石

明石

海

明石海

明石灘

明石濱

明石通門

明石

明石

海

明石海

明石灘

明石濱

明石通門

明石

明石

海

明石海

明石灘

明石濱

明石通門

明石

明石

海

明石海

明石灘

明石濱

明石通門

明石

明石

海

明石海

明石灘

明石濱

明石通門

明石

明石

海

明石海

明石灘

明石濱

明石通門

明石

